

スピーチ学習の構想

スピーチにおける実態

生徒の多くは、スピーチの学習を敬遠しがちです。多くの場合、生徒には歓迎されないでしょう。誰でも人前で話すことには少なからず抵抗があるものです。だからといって、本当にスピーチの学習が嫌いなのかということそういうわけではありません。思わず聞き手が聞き入ってしまうような話をするのができたとか、自分の話を聞き手が本気になって聞いてくれたというような経験が少ないのです。

生徒の多くは、上手にスピーチをしたいと思っています。自分の話に耳を傾けてほしいと願っています。人前で上手に話したいと考えています。だからこそ、よいスピーチの仕方を指導し、伝えることの楽しさを体験させたいと考えました。

指導上の問題点

従来の音声言語学習では、「しっかりとしたテーマをもつ」「このテーマを取り上げる理由を明らかにする」「自分の個性をどう発揮するか検討する」「筋道を立てて論理性を高める」「全体の構成メモをまとめる」などの思考生成過程における指導が欠落していました。音声言語そのものが瞬間的に行われるために、過程における指導が軽視されてきたのかもしれません。

授業改善の方向性

- なるべく自分が実際に体験したことを話すように勧める。それにより、相手に伝えたいという思いがより強くなる。
- 一番聞いてもらいたいことは何か、それを伝えるためには、どんな話から入っていったら効果的かなど、全体の構成を考えながらスピーチメモを作成させる。
- スピーチ原稿はあえて作らず、メモを見ながら、あるいは何も見ないでスピーチをさせる。
- スピーチの前に聞き方のポイントを指導しておく。聞き手がしっかりと話を聞いてくれると、話し手も安心してスピーチをすることができる。
- ビデオカメラを用意し、自分のスピーチを録画させる。自分のスピーチを自分で聞くことで客観的にスピーチを分析できる。
- 学級全員を前にしたスピーチの前段階として、3人1組によるトライアングルスピーチを取り入れる。ここでは、話すことはもとより、聞くことにも重点を置き、スピーチを聞いたあとに質問や意見を出し、双方向的なやりとりが生まれるようにする。

これまでのスピーチ学習では、発信者がある情報を一方的に伝達したり、説明したりするという活動が主でした。しかし、これからのスピーチ学習では、双方向の活動を重視する必要があります。発信→受信→発信といった情報の交信能力こそが、これからのグローバル社会に求められています。そのためには、話し手に対して聞き手が質問をしたり、お互いに考えを交換したりといった時間を設定する必要があります。